

スクール・ミッション （本校の存在意義や社会的役割 目指すべき学校像）	「多様な個性を尊び、未知なるものに挑戦する進取の精神を持った人材を育成する学校」 基礎基本を徹底した深い学びにつながる授業や独自の探究プログラム「嘉穂Dream Compass」を通して、地域から世界へ視野を広げ、持続可能な社会創りや次世代の科学情報技術を担う人材を育成します。		
スクール・ポリシー （三つの方針）	グラデュエーション・ポリシー （育成を目指す資質・能力に 関する方針）	・地域や日本を担い、さらには世界のトップリーダーとして活躍できる学力や教養を身につけた人材の育成 ・物事の本質や真理を追求する姿勢を身につけた人材の育成 ・信頼の意味を理解し、誠実に生きる姿勢を身につけた人材の育成 ・物事に動じない逞しい意思と生きていくために必要な体力を身につけた人材の育成 ・自主性、創造性及び多様な生き方を尊重する姿勢を身につけた地域創りに貢献する人材の育成 ・AIを活用し課題解決を図ることができる力を身につけた次世代を担う科学技術人材の育成 ・自ら将来設計を行うキャリアプランニング力を備えた人材の育成	
	カリキュラム・ポリシー （教育課程の編成及び実施に 関する方針）	・多様な進路に対応したカリキュラム編成 ・基礎的、基本的な知識・技能を確実に習得し、リーダーに必要な深い教養を身につけることができる授業の実施 ・高度な研究課題に取り組むことにより課題解決能力を身につけることができる探究活動の実施 ・中高間及び学科・コース間の交流をとおして、協働の意義を学び主体性、自主性、創造性を育む学校行事を実施	
	アドミッション・ポリシー （入学者の受け入れに 関する方針）	・向上心があり、志の実現に向けて自分の能力を伸ばしたい人 ・さまざまな人と協力し、自分や集団の成長のために努力できる人	

学校運営計画（4月）											
学校運営方針		「質実剛健」・「自主創造」に掲げる精神を実践するとともに、多様な生き方を尊び、未知なるものに挑戦できる人材の育成						評価 （総合）			
昨年度の成果と課題		年度重点目標				具体的目標					
生徒が主体となって学校生活を作っていく姿勢を育むことができた。引き続き、基本的な生徒指導、基本的な学習指導を実施していくことで、生徒の主体性、創造性、多様な生き方を尊重する姿勢と新たな時代が求める学力を育成していく。		「礼節」「多様な生き方を尊重する姿勢」を備え、高い人権意識を持つ生徒の育成を図る。				○人権にかかる職員研修の実施や、職員の適切な言葉遣いの徹底により、職員の人権感覚と人権意識の高揚を図り、強い人権意識に基づいた教育活動を実施する。 ○教育活動全般における情報モラル教育の実施により、生徒の人権感覚の育成と他者への配慮の徹底を図る。					
		生徒のたくましさと誇りの基盤となる「自主性」「主体性」「創造性」の育成を図る。				○潤陵祭(文化祭)・大運動会等の生徒会行事及び部活動を充実させることにより、生徒の「礼節」、「自主性」「主体性」、「創造性」及び「多様な生き方を尊重する姿勢」を育む。 ○各教科のシラバスを改善することにより、生徒が主体的に学習に取り組む姿勢を確立させる。					
		生徒の課題解決力の基盤となる「知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力」の育成を図る。				○各教科で考査並びに模試結果等の分析を確実に行い、指導方法の改善を図ること(指導と評価の一体化)により、生徒に「基礎的・基本的な知識・技能」を確実に習得させ、「思考力」「判断力」「表現力」を育成する。 ○教員が質の高い授業と質の高い考査を実施することにより、「深い学びに繋がる問い」を実践し、生徒の学力を向上させる。 ○全職員が「学びにおける生徒の成長の見取りと学力の向上」を自己評価の項目に位置づけ、年間を通して研鑽に取り組む。					
		「嘉穂Dream Compass」において、生徒の個性及び自ら学び考え行動する能力を開発し、生徒の第一希望進路の実現を図る				○情報リテラシーの習得及び「AIチャレンジ」の活用により、課題解決能力を育成する。 ○嘉穂Dream Compassを軸として課題発見・課題解決能力を育成するとともに進路観を育成する。					
自己評価								学校関係者評価			
評価項目	具体的目標	具体的方策		生徒、保護者対象のアンケート（外部アンケート等）の結果等		評価（3月）		結果の考察と次年度の課題		項目ごとの評価	学校関係者評価委員会からの意見
学習指導	深い学びにつながる授業改善の促進	シラバスに基づいた授業を展開し、各学期末にその反省及び改善を行う。		定期考査2週間前から1週間前までの学習時間調査を実施し、自宅学習時間や課題の量を検討する資料とした。		A	A	A	シラバスの作成及びその活用について考察できた。更なる深い学びにつなげるための授業改善を推進していく必要がある。そのためには、考査問題検討会や模試分析会など、教科の取組を一層充実させる必要がある。	A	自動採点システムなどを活用することで、さらに業務のスリム化を推進して欲しい。
		外部模試などの客観的データに基づき各教科における深い学びに繋がる授業の実態の分析を行い、授業改善に生かす。				B					
		習熟度別の成績集計により、習熟度別授業の成果の検証と改善を図る。				A					
	学習指導・校務における情報化の更なる推進	1人1台端末の運用方法を見直し、探究活動等が円滑に行われるよう整備する。情報モラルを含め端末の適切な使用を啓発する。 教員が生徒に向き合う時間を確保すべく統合型校務支援システムの効果的運用方法を研究する。 教員を対象にデジタルツールの周知・導入を推進し、深い学びに繋がる授業実践の一助とする。		特記事項なし。		A	B	B	授業における1人1台端末の使用頻度は増加している。自宅学習についての活用をさらに推進するために、現在利用しているデジタルツールの活用法等について職員研修を計画的に実施していく。また、端末の貸出・持ち帰りについての環境を改善していく。		その時間を職員研修や授業改善のために使うことができることを期待している。
生徒指導	規範意識の高揚と生徒の主体性の育成	全ての教育活動において教員及び生徒の言語環境を整え、生徒と教員の堅実な信頼関係を築く。 生徒主体の生徒会活動を促進するため、他校との生徒会交流やリーダーズ研修を充実させる。 学校行事の企画・運営を生徒主体で行うことにより、創造力や実行力及び協調性の育成を図る。（生徒会の育成）		生徒の主体性を育むため、フォームを利用し、各行事ごとに全校生徒に意識調査を行い、企画運営に反映させることができた。		B	A	A	潤陵祭や大運動会を実行委員の生徒主体で実施するという大枠はできた。真の意味での自主的な運営となるための支援の一層の充実を図る。	A	潤陵祭・大運動会を観望したが、生き生きとした生徒の姿に感動した。
						A					
						A					
	心身の健康づくりと安全な教育環境の整備	生徒への声かけを充実させることにより、生徒に安心感を与え、安定した情緒と自己共に大切にできる思いやりの心を育む。 面談やスクールカウンセリング等の教育相談では保護者等との連携を強化し、その充実を図る。 美化活動の意義を理解させ、清掃活動など自ら主体的に環境整備や改善に努めることができる生徒を育成する。		担任や副担任による個人面談を充実させ、早期に生徒の変化に気づくことができた。		A	A	A	個人面談を担任と副担任の協力体制のもとで実施することにより面談の回数を増やすことができ、細かなフォローにつなげることができた。多様な生徒に対応するため、さらに面談の量と質を向上させることが必要である。		生徒会や行事の実行委員を中心とした主体的な取組を今後も大切にしていほしい。
進路指導	確かな学力の定着と第一希望進路の実現	「学びの基礎診断」模試分析を充実させ、生徒学力向上への指導につなげる。 新教育課程に向けて課外や補習の内容を再検討し、受講者増と学力向上を図る。 難関大総合型・学校推薦型対策を早期に始め、組織的に推進していく。		アンケートや学習時間調査から1・2年次での学習習慣づけが不十分であることが分かった。課外受講者が徐々に減少した。		A	A	A	確かな学力の定着に向けて、課外・模試分析・復習を実施してきた。大学の総合型選抜・学校推薦型選抜の結果を受けて、改善点を協議し、効果的な指導を進めていく必要がある。	A	模試の分析等、組織的な取組をさらに充実させて、今後も生徒が希望進路に進めるように頑張ってもらいたい。
						B					
						A					
	生徒のキャリア形成につながる探究活動とKDCでの取組の深化	「総合的な探究の時間」の活動内容の精査と生徒の進路実現に繋がる成果物の作成を促進する。 学年と連携して関東研修・南九州研修の内容を再考する。特に関東研修は修学旅行とは異なる企業研修を充実させる。 一人一台端末を活用し、大学・企業等からの公募型ワークショップへ積極的な参加を図る。		関東研修・南九州研修について、参加者アンケートの結果は好評であった。		B	A	A	関東研修・南九州研修の訪問先や内容を充実させ、さらに魅力的・効果的なものにしたい。「総合的な探究の時間」の取組については、学校全体としてのデザインを反映させていくことが課題である。		

様式3

研修	教科指導力向上に資する研修の活性化	附属中学校への参観を重点的に呼びかけ、日常的に相互授業参観を行う環境を整える。	授業評価アンケートは各学年ともに90%以上回収できた。単元別アンケートの実施が少しずつ増えている。	B	B	B	相互授業参観は授業力向上研究会もあり、参観者の数も増え、感想も好評である。特に中学校への積極的な授業参観を更に進めている。 授業アンケートのフィードバックを速やかに行い、授業改善を進めていくことが大切である。	A	生徒へのフィードバックを適時に行うことによりさらに効果的な指導をお願いしたい。
		授業評価アンケートを速やかに返却するとともに、単元別アンケートの活用を呼びかける。		B					
		研修報告書「登々樹」で授業研修や個人研修の事績を残し、職員に還元する。		B					
	校内作成資料の適正化と教職員相互の連携	PTA総会資料をはじめとする資料作成の過程を整理し、データの管理を確実に行う。	公開授業アンケートの結果は、授業に対しても、生徒の授業態度に対しても概ね良好である。	A	A		PTA役員との協力を継続し、PTA総会・研修会が生徒及び保護者にとって有意義なものになるように推進していく。危機管理マニュアルについては、随時更新し実効性の高いものにしていく必要がある。		外部講師を招いての授業力向上研修はとても良い取組だと思うので、今後も継続してほしい。
職場環境の整理と学校共済会のあり方の見直しを行い、教職員間の連携や親睦を深める。			A						
防災避難訓練を実施に合ったものにし、「危機管理マニュアル」との整合性を図る。			B						
第1学年	確かな学力の定着	生徒の知的好奇心を引き出す授業の展開、質の高い考查を実施する。	到達度テストアンケートや学習時間調査から、自ら学ぶ姿勢が十分には定着できていない。	B	A	A	日々の授業や定期考査に向けた取組、シラバスの活用等を通して、学習習慣は定着しつつある。進路意識を更に高める活動をより充実させ、見通しを持った学習を実現できるように導く。	A	生徒の主体性、協働性の成長は行事の様子や地域のイベント等での姿を見ても感じられる。
		教師と生徒の言語環境を整えううえで活発なコミュニケーションを図り、授業を生徒の居場所とする。		A					
		定期考査と模擬試験を詳細に分析して生徒と共有したうえで、中長期的な学習計画立案と振り返りを促す。		A					
	主体性、協働性、多様な生き方を尊重する姿勢の育成	実行委員制による学年行事の設定により、主体性を育む機会づくりと支援を行う。	スタートアップキャンプや創志セミナーの感想文等より、学級の枠を超えて主体的・協働的に取り組む心の満足度は高い。	A	A		各学校行事では、生徒が主体的・共同的に活動する姿を多く見ることができた。今後は、学校全体のリーダーとして活躍できる人材を育成するために、継続的に仕掛けを行っていく。		
		授業や学校・学年行事において他者と協働する場面を積極的に設定し、協働性を育む機会づくりと支援を行う。		A					
		学級の枠を超えた学年行事や総合的な探究の時間を展開し、多様な個性を持つ人物との繋がりを育むように促す。		A					
第2学年	自己実現に向けた生徒支援、キャリア教育の充実	高校2年生としての学習習慣を確立させ、自学時間を伸ばす。	学習時間調査や外部模試の結果から、高校2年生としての学習習慣が身に付いているとは言いがたい。	B	B	A	生徒会活動や部活動などに意欲的に取り組み、学年全体として高め合おうとする姿勢が見られた。学習時間が不足しているの、具体的な目標設定を行わせ、計画的に学習する習慣を身につけさせる。	A	人材育成のために様々な取組がなされている。継続して行っていきたい。
		学習、行事、部活動等において、見通しを持って行動し、対話を通して学び合い、目標達成のために努力し続ける。		B					
		総探や修学旅行を通して、本物に触れ、実態を知る機会を充実させ、自己の可能性と社会との繋がりを発見させる。		A					
	信頼関係の構築	生徒も教師も言語環境を整え、豊かなコミュニケーション活動を通して、心を育て合う。	学年リーダーや生徒会を中心に、学年の長所や課題を学年で共有し、前向きに成長し続けようとする取り組みができた。	A	A		学年リーダーを中心に、共同生活をより良いものにするために自分たちで声掛けをし、行動することができた。さらに集団として成長するため機に「どうあるべきか」を問いかけて、生徒自身に考えさせていく。		
		素直に自他の良さや失敗を認め合い、誠実に行動する集団作りを行う。		A					
		全教育活動を通して、校内外で他者へ配慮する態度を育む。		B					
第3学年	一人一人の進路実現につなげるきめ細かい進路指導	高い進路目標の設定を行い、多様な進路に対応することができるよう質の高い授業を展開する。	学習時間調査では、学年内の時間数は学期を重ねることに増えたが、前年度と比較すると時間数が少なかった。	A	A	A	学習時間の確保が3年間通しての課題であった。学習する意義や進路目標を早期に決定する必要がある。そのためには、3年間を見通した指導を学年職員で協力して行うことが重要である。	A	行事を通して人材育成と学力向上にむけた組織的な指導が適切に行われていることは評価できる。
		受験生になる学年であるため、もう一度自律した生活を見直し、自学時間を伸ばす。		B					
		模試分析で指導改善方法を常に模索し続ける。		A					
	中高6学年のリーダーとしての資質向上	最上級生として勉学はもちろん部活動や学校行事に最後まで粘り強く取り組む姿勢を育む。	3年間の集大成の場である潤陵祭と大運動会の二大行事は生徒の満足度の高い行事になった。	A	A		潤陵祭・大運動会の二大行事を通して信頼されるリーダーの資質を高めることができた。学校行事は、生徒の自主性・主体性を伸ばす絶好の機会である。学習指導と同様、3年間を見通した指導が必要である。		
		信頼されるリーダーになるべく、潤陵祭、大運動会等の生徒会行事に誠実に取り組むことを支援する。		A					
		多様な個性を認める態度の醸成、その中で他者の立場に立った振舞い、言葉遣いを身に付けさせる。		A					
理数科	基礎的・基本的な知識・技能及び課題解決能力の育成	基礎・基本、発展的な内容を取り扱った授業を展開する。	特記事項無し	A	A	A	理数科として、難関大学へ合格できる学力を身につけ、進路実績を残すことが重要である。そのためには、各教科担当の指導力向上が大きな課題であるという共通認識を持つことが必要である。	A	校内外での発表会への積極的な取組を継続して、高い進路実績を残していきたい。
		授業進度の工夫、演習問題の精選により確かな学力をつけさせる。		B					
		理数探究において、生徒の主体的活動を支える指導を行う。		A					
	理数科行事の充実による、より具体的な将来像の育成	校内外の課題研究発表会へ参加させる。	九州大学、九州工業大学での研修の満足度は非常に高かった。また、大学教授からは積極的に質問する生徒達の姿を高く評価された。	A	A		高大連携の取組が定着してきた。意欲的に参加する生徒も多い。大学教授の講義や研究室訪問など最先端の科学や本物に触れる機会を計画的に準備し、知的好奇心を伸ばしていく。		
		大学訪問、施設見学、大学講義を通して進路意識を高めさせる。		A					
		大学教授からの指導助言を仰ぎ、より高度な探究活動を行う環境を整える。		A					
武道・日本文化コース	武道・日本文化コースの生徒育成像及び進路指導方針の校内外への周知	生徒育成像及び進路指導方針を年度初めの会議にて全職員に周知する。		B	A	A	コースが目指す生徒育成像を明確にし、見通しを持って取り組むために担当教員の指導力向上が必要である。剣道指導者研修会を開催できたが、その他の研修会を同様に実施し、研鑽していく。	A	分割授業など、特色に応じた活動が充実している。
		広報活動を充実させる。	模試の結果や進路実績をもとに分析・検討を行う必要がある。	A					
		武道・日本文化コース説明会の内容を精査し、効果的に実施する。		A					
	幅広い知識と教養を身に付ける、コース独自の行事の検討	課題研究内容を検討し、成果発表会の充実を図る。		A	A		学校設定科目の内容を検討し、改善している。多岐にわたる生徒の希望進路に対応するため、習熟度別・少人数制の授業を実施していく。その効果を上げるために教科担当者の会議を計画的に実施する。		
		日本文化実習の内容を精査する。	学校設定科目について、より専門的に深く学ぶことができた。	B					
		学校設定科目で実施したものを総合的な探究の時間とリンクさせる。		A					
学校いじめ防止基本方針	いじめの未然防止	いじめが起きにくい・いじめを許さない環境をつくるために、HR活動の充実と学期に1回エンカウンターを行う。	学校生活アンケートによる生徒のセルフチェック、また生徒会や新聞部の協力により、生徒会行事における生徒の達成感や自己肯定感を確認することができた。	A	A	A	生徒間のトラブルの大半が、双方のコミュニケーション不足によるものである。エンカウンターなどの取組を継続して行い、他者への配慮ができる生徒の育成に努める。教師の言語環境について引き続き留意する。	A	生徒のいじめ未然防止のために、教職員の言語環境を整えるという考え方は素晴らしいことである。今後も継続して取り組んでほしい。
		教育活動全体を通して、言語環境を整え、他者へ配慮できる生徒の育成を図る。		B					
		生徒主体の生徒会行事を通じて、達成感や自己肯定感を高揚させる。		A					
	いじめの早期発見・事案対策	生徒へのアンケートを月に1回、保護者へのアンケートを学期に1回行う。	生徒へのアンケートを通じて、生徒の変化に早期に気づき、適切な手立てをとることができた。	A	A		「いじめは、どこの学校でも起こりうる」という前提に立ち、「いじめ0」でなく「いじめ見逃し0」を達成するための取組を充実させていく。何かあれば、いじめ対策委員会へすぐに報告することを全教員で共有する。		
		教育相談を年に3回、保護者面談を年に2回実施する。		A					
		いじめ問題対策委員会における組織的かつ迅速な対応をする。		A					

自己評価及び学校関係者評価を踏まえた今後の改善策

- ・生徒がシラバスを活用し、見通しをもって自学や授業、定期考査に取り組むことができるよう、積極的に授業改善を行っていく。
- ・生徒の主体性、自主性をさらに成長させるための適切な指導と支援の充実を図る。
- ・積極的かつ効果的、また戦略的な広報活動を充実させると同時に、本校独自の教育活動を充実させる。
- ・家庭、地域、関係諸機関との連携を密にし、生徒の状況把握に努め、安心・安全な教育環境をつくっていく。

学校関係者評価	
評価(総合)	自己評価は
A	A:適切である
	B:概ね適切である
	C:やや適切でない
	D:不適切である
評価項目以外のものに関する意見	
地域でのイベントに参加している生徒が、主体的に活動する様子を見て感心していた。日頃の教育の賜物であると改めて思う。	